

小川政弘作 「疑い① 不信の時」

効果音 (ドアのノック音)
富田和彦 だあれ？
石井美和子 わたし、美和子。
和彦 ああ、君か。入れよ。
効果音 (ドアの開閉音)
美和子 あ～あ、重かった。和彦君ったら、いきなり「現国の参考書みんな持ってこい」なんて言うんだもん。電車に乗って、あの坂道登って。手数料高いわよ。
和彦 分かってる。今度冷たいもの買ってくるよ。ちょっと待ってて。ああ、机の上の太宰の「人間失格」読んでいて。あとで教えてもらうから。
美和子 まあ！
効果音 (ドアの開閉音)
美和子 いつもああなんだから。まあいいわ。えーと…。
効果音 (ページをめくる音。ポトンと封筒が床に落ちる)
美和子 「富田和彦様。沢田みゆき。」沢田、みゆき？ 3組の？ 彼女のこと、彼、知ってたのかしら。なんだろう。何が書いてあるんだろう。ちょっと…、ちょっとだけ読んじゃおう。
効果音 (封筒から手紙を取り出す)
美和子 「この間はありがとうございました。楽しい思い出になりました。(みゆきの声) 高校に入ってから、和彦さんとクラスは別になっちゃったけど、中学時代のあの事、忘れないで、来てくれて、みゆき、本当にうれしかった。頂いた物、大事に大事に使います。ではまた学校で。さようなら。和彦様。沢田みゆき。」
和彦 (オフから)ララーラ ラララ ラーララ(「歌いつつ歩まん」のメロディーを口ずさみながら)
効果音 (みゆき、慌てて手紙を封筒にしまう)
効果音 (ドア開く)
和彦 ただいま。はい、アイスクリーム。それと美和ちゃんの好きなポテトチップ。溶けないうち食べようぜ。
美和子 和彦君。
和彦 ん？
美和子 3組の沢田みゆきさん、知ってる？
和彦 沢田さん？ ああ、知ってるよ。中学時代、3年間一緒だったもん。
美和子 ふーん。
和彦 その沢田さんがどうかしたの？
美和子 ン、ううん、なんでもないの。それよか、勉強勉強…。
ナレーション 石井美和子は、高校 2 年生。同じクラスの富田和彦とは、演劇部で一緒に活動するようになってから、急速に親しくなっていた。心の中では愛し始めていたのかもしれない。そんな彼女にとって、その日の出来事は、大きなショックだった。
美和子 沢田さんが中学時代からの友達だなんて、彼、今まで一言も言わなかった。時々会ってるのかしら。ああやって、手紙のやり取りをしてるのかしら。——そんなはずないわ。彼がわ

たし以外の女の人と付き合ってるなんて。でも、中学時代の“あの事”ってなんだろう。何があったんだろう。もしかして、彼と沢田さんの間には…。バカ、美和子のバカ！ 何をバかなこと考えてるんだろう。でも…。

みゆき(エコー) 頂いた物、大事に大事に使います。

美和子 何をあげたんだろう。なんのために？ 大事なものって？ それじゃ、それじゃ、このわたしは？

ナレーション 彼女はその夜、まんじりともせずに明かした。考え出せば、次から次と疑いの黒い雲が渦を巻くように頭の中に浮かんでくるのだった。「疑うことは悪いことだ」と、頭の中で何度も何度も打ち消しても、どうしようもなかった。それまでは、頭から笑って聞き流していた彼のほかの女性とのうわさ話や、彼の中学時代のことなどが、急に気になり出して来て、目の前が真っ暗になっていくようだった。

美和子(モノローグ)ダメ。もう何も信じられない。一体どうしたらいいの？(エコー)

<完>